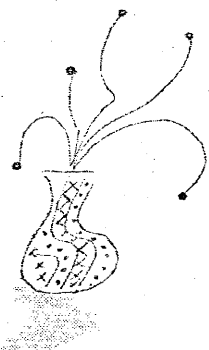


近現代農村の教育事情



(前 承)

第二章 初等教育

第三節 戦争と学校教育

第四節 大正戦争と学校教育

第五節 敗戦後の学校教育

小 王 道 明

第三節 戦争と小学校教育

【片田尋常高等小学校】

明治四一年(一九〇八)四月、前年の小学校令および小学校施行規則の改正にもとづき、義務教育年限が、二年延長されて尋常小学校は六カ年になり、高等科は二カ年となった。これは昭和一六(一九四一)年三月まで続けられていた。この改訂にもなつて、政府は修身教科書の改訂も行い、学校教育においては、「国民の精華」とされた「忠孝の大義」、家族、国家の思想がより強調されることになった。また明治四一(一九〇八)年一二月には、「戊申詔書」應平が片田校へも配布され、道徳、国防教育の根本方針の中に加えられている。

日露戦争後、一時的ではあるが全般的な好景気をむかえ、その後到来した不況は、社会主義運動のたかまりをもたらした。彼に大正デモクラシーと呼ばれるような自由主義思想の伸張もみられるのであるが、これらの運動への対抗としての教育が拡充され、国家主義、軍国主義的傾向が濃厚になった。この傾向は大正期に入ってからますます強化されていく。

大正三(一九一四)年、第一次大戦がおこりこれに日本も参戦すると、その戦争情況がそのまま片田校の学校行事に反映する。中国山東省のドイツ租借地青島が日本軍によって陥落すれば、これを長谷山に登って祝う。学芸会は、「君が代育唱」、「教育勅語朗読」から始められる。習字題材にも、「奮闘英雄」「義勇奉公」、「作戦計画」などと、軍争色がみられる。

国産発揚の名のもとに軍国教育が進められているうちに、児童就学率は男女とも明治四四(一九一一)年頃より一〇のパー

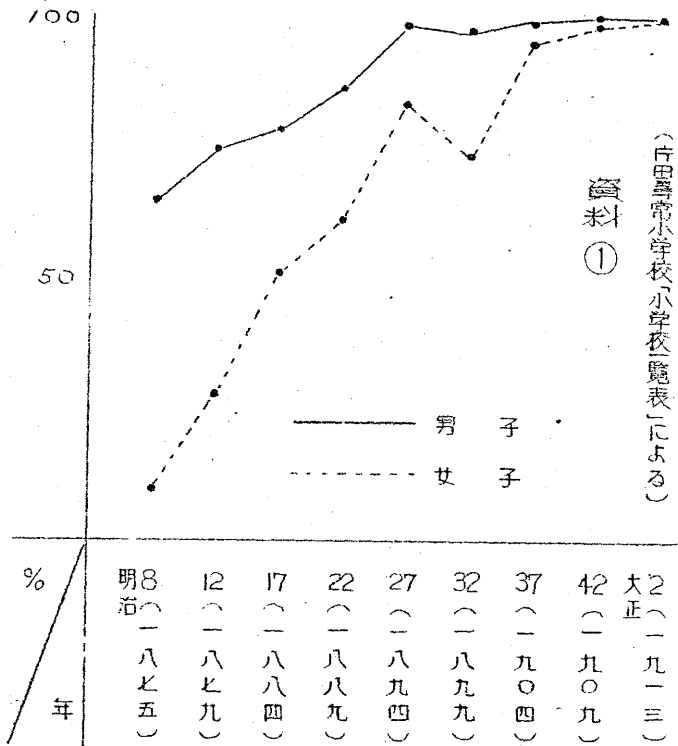
セントをみるようになり、学芸会開催の際（大正四年度）には、義務教育の重要性が顕著されている。『資料一』しかし、児童の中には家庭の手情、農繁期などによって数日休けて欠席するものも多々あった。

次に引用する「片田村大正四年中事務報告書」教育の項に記されている如く、そのために、「優良教師ヲ招聘シ成績アル教育」が学校経営の一方針とされ、教員は「相卒ヒテ研究修養

児童就学率

（片田尋常小学校「小学校概観表」による）

資料①



二つの児童訓育に蓄積」して教育効果の向上を口かった。

『教 育』

片田尋常高等小学校教員の異動ハ左記ノ通りニシテ現在訓導名、代用教員一名ナリ、農業補習学校ハ訓導五名ニシテ何レモ片田尋常高等小学校取願兼務ス、女子技芸学校ハ訓導一名代用教員四名ナリ。

本年一月二十五日代用教員田中光寛退任ニ付、代用教員田中勉後任ニ、三月三十一日訓導田中栄助明合尋常高等小学校へ転任ニ付高宮尋常高等小学校訓導田中常松後任ニ訓導岩合元三郎安東尋常高等小学校へ転任ニ付大田助次口後任ニ訓導丸岡志津、明徳尋常高等小学校へ転任ニ付全校訓導寺除志後任ニ代用教員山路文次郎片原尋常高等小学校へ転任ニ付、松阪尋常小学校訓導佐伯嘉一後任ニ五月三十一日代用教員西村寛退任ニ付代用教員松村重後任、八月三十一日訓導佐伯嘉一退任成高等小学校へ転任ニ付存義尋常高等小学校訓導中山格郎後任トナル。

本年中入学生児童尋常科五〇名高等科三〇名ニシテ卒業生尋常科三八名高等科二九名ナリ、現在尋常科三三〇名高等科六名ニシテ編制ハ編制カ？ニシテ高等科五一名エラ一学級ニ編成ス、学令児童三六〇名内男一九八名、女一六二名ニシテ就学男一七二名、女一四八名ナリ、就学学令児童ニ比シ男セトモ百二対八百ナリ。

農業補習学校ハ五ヶ所ニ分教場ヲ設置シ本年入学者二六名卒業生一〇名ニシテ現在生徒六八名ナリ。

女子技芸学校ハ五ヶ所ニ分教場ヲ設ケ現在生徒六五名ナリ。

児童出席成績ハ尋常科男女平均九三人、高等科九八人ニシテホダ充分ナラザルニヨリ、種々奨励法ヲ講シエテ督励シツツアルトモ家庭ノ門僑ト復業ノ場合ニ於テハ在マニシテ欠席ヲナスモノアルヲ以テ教員ニ歩ル欠席否ニ対シテハ職員ヲシテ家庭ヲ訪問出席ヲ督励セシメテ教育ノ普及ニ努メツツアリ、

教育訓練ノ方法ハ該教師ヲ招聘シ、威权アル教育ヲナスヲ根本ノ方針トシ教員ノ充実ニ努メタリシカ今ヤ稍々完備ノ期ニ達シ職員等相率ヒテ研究修養ニ勉メ児童訓育ニ盡碎シツツアル効績ハ詢ニ堪美スベキナリ。

しかし當時の村内の情况は、露張して表現されていいると思われるが、「社会、風潮險悪ニシテ道義地ヲ希ラウ」と言われ、学校教育だけでは教育効果が大からないと意識されていた。そこで小学校長田中常松氏を中心に、学校教育と社会教育の結合が試みられ、学校を「社会感化」の中心にしようとする動きもあった。

大正一三（一九二四）年一月、片田校にも「国民精神作興ニ関スル詔書」謄本が配布された。これは政府の文教政策の中心に、「団体」の明徴、国民精神の作興を経済生活の改善、国力の培養が置かれたことと共に国家主義的教育をまず／＼整備していくものであった。これに歩調が合わされて、学校行事の中に「節約週」「銀鍊会」（尋常五年以上による早朝の長谷山登山）などが加えられはじめた。

【学芸会】昭和初期の学芸会の様子を少しみてみよう。庚戌

種目には、唱歌劇、対話劇、話方、唱歌、独唱、実験、書き写（学級代表による席上揮毫）、図画など、教科に密着したものが多く、この学芸会の趣旨について次に記そう。（頁二）

学芸会や展覧会曰学校のお祭りさわざではありません。御覧の通り話方などと種々のことをやらせますのは、時に指揮方に感動して戴きたいと考え方から品かへ手かへをして、その表現等に苦心したのであります。どうか学芸会や展覧会を遊して、学校が如何なる考へでゐるかを御察し下されて、家庭教育、特に子供は家庭に在る時間が大分分でありますから、朕方の上の御参考として戴きたいと僥するものであります。

この学芸会は文字通り、「日々の学習上より体得したる学芸」の発表会であつた。このことは次に記す学芸会のプログラムにも表われていよう。（次頁掲載）

教育の軍国主義化 昭和六（一九三一）年の滿洲事変に就き、日中戦争、太平洋戦争と、戦争の拡大化と並行して、政府の文教政策はますます国家主義的要素が濃厚になつた。また逆にわが國の教育が軍国主義の道を歩み始めたこと、戦争の拡大を国民の前に正当化し、遂行させていく上に非常に大きな役割を負うようになることでもあつた。学校は次々と出される、「文部省訓令」を、教育の現場において児童に對し、あるいは地域社会に浸透させる「思想善導と教化の中心」となつていた。

安曇郡片田尋常高等小学校昭和五年児童学芸会順序

一 開 会 二 呂が代合唱 三 開会の挨拶

二 学 芸

番号	種別	題 目	学年	児 童 名	話 語	ルックアップブルグ	学年	坂口
一	唱	雨	三	女生全体	三	蝶にとまれ	高	川台 力男
二	読	奈 良	六	野田 薫	二	思出の林檎	高	川村 利勝
三	唱	大 黒 様	二	男生全体	二	人魚の夢	高	女生全体
四	対話	陸の漁り	高	池田 外 教 員	二	石 地 裁	高	鈴水 外 教 員
五	読	にしかは保証	高	野田 外 教 員	二	臨時村会	高	富田 外 教 員
六	唱	広瀬中佐	四	男生全体	二	漁業の歌	高	男生全体
七	読	船 場 蟹	高	谷口 二郎	二	花 咲 爺	高	藏田 外 教 員
八	唱	豊く生さん	高	堀山 利勝	三	花 咲 爺	高	上出 外 教 員
九	読	村上義光	高	坂井 外 教 員	三	なすの与一	高	島田 正義
一〇	話	大男と豚	高	森山 外 教 員	三	珠算競技会	高	野田 外 教 員
一一	話	丘五郎	三	野田 研一	三	金 太 郎	高	野田 外 教 員
一二	唱	出 船	高	女生全体	三	明 蝶	高	岡 外 教 員
一三	読	苔 採 り	高	谷口 二郎	三	誠 友	高	男生全体
一四	唱	望 心	高	女生全体	三	アルカリの反応	高	岡 外 教 員
一五	対話	ほたるの忍乳	高	川村 外 教 員	三	母をたづねて	高	岡 外 教 員
一六	〃	北オと星	高	辻本 外 教 員	三	しくじりう	高	庄村 外 教 員
一七	話	山星の夕	高	野田 外 教 員	三	銀 告	高	野田 外 教 員
一八	唱	桜井ノ別	高	男生全体	四	遠足の前日	高	野田 外 教 員
一九	劇	友だち	高	銀田 外 教 員	四	春 近 し	高	池田 外 教 員
二〇	話	一口話	高	庄村 外 教 員	四	学校のれいこ	高	橋本 外 教 員
二一	唱	春が来た	高	女生全体	四	けんやく太郎	高	庄村 外 教 員

- 片田校の場合においても毎年の重
要な行事である「学芸会」および
「父兄懇談会」の際に行われる学友
長の「講話」などにも年を追って誠
時意識が強くなる。昭和六年度父兄
懇談会の学校長講話要領をみれば、
- ③
- (1) 勤労主義の教育を施しつつあ
ること。
 - (2) 家庭と学校と協力して児童を
のびやかに育てること。
 - (3) 家庭の婦人と現代国語の打開
策
 - (4) 養育者の注意

とある。また当時の校訓とその
実施事項は「規律……水曜奮闘。勤
労……美化学習。勤使財金。感謝……
奉安殿奉拜。神前奉拜」の三項目
であり、「校訓頭掲げ人を養成す」
ることや児童教育の方針とされてい
たのである。

学習効果をあげるためには、「幼
いといえども自学自習の態度を養
うために家庭に於ける予習復習の奨励

と懸望しいはれぬこと」(尋二)「予習復習を自発的にすること」(尋四)などを家庭に希望し「自治の培養し子供に仕事を変れる」(尋六)というようない見兒童の自発性に立脚した方法とられたのである。だがこの現象は「皇國の道」を興致していく上に、自発的學習方法をその手段としてとつていえるかもしれない。当時の農村の困窮と都會の不況によって深刻化した教育の矛盾の克服をはかろうとして全国的にあらわれた「郷土教育」に通ずる「郷土に立脚せる教育」(尋一)が

映し、教科書は古本を使用することが奨励され、學用品の節約と廢物利用はたまにま報告貯金と國防献金が要望された。衣服の新調にも學校長の許可が必要とされるようになった。(4)【父母の教育要求】次にあげる表は片岡尋常高等小学校「父兄懇談会記録」(第二編)に記された父母と學校担任教師との懇談の内容を整理したものである。父母の教育に対する要求として確實はアンケートによつたものではなく、また懇談会の席上において発言された意見のすべてでもないために、正確とはいえないがそれにしては父母の教育に対する関心が、どんな

三 閉 会 二 内 会 の 展 望 三 退 場

四四	話	舌 加 狂	尋二	眞田 甲子	五五	對話	白百合の花	尋六	岡田 十右
四五	尋端	旅 愁	六	川原 田吉	五六	話	雀の子皮	一	山 田 小次
四六	理	大山の話	高一	門田 幸一	五七	刺	石巻丸	三	清水 幸一
四七	鳴	水仙の花	二	女生全体	五八	對話	巡礼唄	高一	北尾 シズ子
四八	話	節 分	第四	庄村 林義	五九	話	鬼の棟上	尋二	岡田 次郎
四九	對話	名譽ある隊	第三	辻 秀雄	六〇	話	まんじゆの返	尋三	永井 十五
五〇	話	虎の窟	第一	柳中 大六	六一	話	絹 鯨 船	五	奥田 キ行
五一	對話	今田子さん	尋六	奥山 大六	六二	對話	約化島の衛生	六	谷口 十右
五二	刺	大蛇退治	尋五	川合 外十吉	六三	刺	お月さま	四	女生全体
五三	荒	獅子と武士	尋四	山路 敬子	六四	對話	心の鐘	高一	川原 武夫
五四	理	呼鈴の作り方	高一	岡田 久正	六五	唱	早 春 歌	高三	女生全体
五五	尋一	細中 生	尋四	坂口 一夫	六六	尋三	山 崎 龍藏	高一	野田 ヤス正
五六	尋二	野田 猛	尋五	川合 力男	六七	尋四	北尾 龍藏	高一	岡田 ヤス正
五七	尋三	西川 猛	高一	岡田 力男	六八	尋五	河野 さく	高一	岡田 ヤス正
五八	尋四	納屋 内宿男	高一	岡田 力男	六九	尋六	倉田 さく	高一	岡田 ヤス正
五九	尋五	野田 猛	高一	岡田 力男	七〇	尋七	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
六〇	尋六	野田 猛	高一	岡田 力男	七一	尋八	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
六一	尋七	野田 猛	高一	岡田 力男	七二	尋九	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
六二	尋八	野田 猛	高一	岡田 力男	七三	尋十	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
六三	尋九	野田 猛	高一	岡田 力男	七四	尋十一	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
六四	尋十	野田 猛	高一	岡田 力男	七五	尋十二	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
六五	尋十一	野田 猛	高一	岡田 力男	七六	尋十三	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
六六	尋十二	野田 猛	高一	岡田 力男	七七	尋十四	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
六七	尋十三	野田 猛	高一	岡田 力男	七八	尋十五	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
六八	尋十四	野田 猛	高一	岡田 力男	七九	尋十六	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
六九	尋十五	野田 猛	高一	岡田 力男	八〇	尋十七	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
七〇	尋十六	野田 猛	高一	岡田 力男	八一	尋十八	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
七一	尋十七	野田 猛	高一	岡田 力男	八二	尋十九	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
七二	尋十八	野田 猛	高一	岡田 力男	八三	尋二十	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
七三	尋十九	野田 猛	高一	岡田 力男	八四	尋二十一	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
七四	尋二十	野田 猛	高一	岡田 力男	八五	尋二十二	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
七五	尋二十一	野田 猛	高一	岡田 力男	八六	尋二十三	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
七六	尋二十二	野田 猛	高一	岡田 力男	八七	尋二十四	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
七七	尋二十三	野田 猛	高一	岡田 力男	八八	尋二十五	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
七八	尋二十四	野田 猛	高一	岡田 力男	八九	尋二十六	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
七九	尋二十五	野田 猛	高一	岡田 力男	九〇	尋二十七	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
八〇	尋二十六	野田 猛	高一	岡田 力男	九一	尋二十八	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
八一	尋二十七	野田 猛	高一	岡田 力男	九二	尋二十九	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
八二	尋二十八	野田 猛	高一	岡田 力男	九三	尋三十	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
八三	尋二十九	野田 猛	高一	岡田 力男	九四	尋三十一	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
八四	尋三十	野田 猛	高一	岡田 力男	九五	尋三十二	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
八五	尋三十一	野田 猛	高一	岡田 力男	九六	尋三十三	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
八六	尋三十二	野田 猛	高一	岡田 力男	九七	尋三十四	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
八七	尋三十三	野田 猛	高一	岡田 力男	九八	尋三十五	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
八八	尋三十四	野田 猛	高一	岡田 力男	九九	尋三十六	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
八九	尋三十五	野田 猛	高一	岡田 力男	一〇〇	尋三十七	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
九〇	尋三十六	野田 猛	高一	岡田 力男	一〇一	尋三十八	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
九一	尋三十七	野田 猛	高一	岡田 力男	一〇二	尋三十九	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
九二	尋三十八	野田 猛	高一	岡田 力男	一〇三	尋四十	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
九三	尋三十九	野田 猛	高一	岡田 力男	一〇四	尋四十一	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
九四	尋四十	野田 猛	高一	岡田 力男	一〇五	尋四十二	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
九五	尋四十一	野田 猛	高一	岡田 力男	一〇六	尋四十三	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
九六	尋四十二	野田 猛	高一	岡田 力男	一〇七	尋四十四	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
九七	尋四十三	野田 猛	高一	岡田 力男	一〇八	尋四十五	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
九八	尋四十四	野田 猛	高一	岡田 力男	一〇九	尋四十六	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
九九	尋四十五	野田 猛	高一	岡田 力男	一一〇	尋四十七	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正
一〇〇	尋四十六	野田 猛	高一	岡田 力男	一一一	尋四十八	黒川 子工	高一	岡田 ヤス正

學校管理の一頁目に、また「勤勞勞作教育と兒童」小夏休における兒童の活動の一つとして父母に提議がえされている。父母に対する學校長の講話では「小學教育は國運隆昌の根本」であり、「天賦と心得て教育界に臨陣」すること、教育者の態度であるとして、各學校の教育方針は全く教育そのものだけに限られていたのである。この傾向は以後数年間続いている。

昭和一二(一九三七)年頃より國家の軍事費が大いに膨張し、インフレーションの傾向を強め、物価は騰貴し、生活は困難をましてきた。これはただちに兒童の學校生活にも反

ものであるかを知る上には役立つと思われよう。
児童の教育は学校だけでなく、家庭および社会との協力においてこそ充分達成されることから、教師と父母との提携にもっとき教育効果をたかめようとする動きは、教師側から

	計	遊	止	魚釣	水泳の楽	家庭としてほしい	学用品の供用法	家庭で習ふこと	宿題を出してほ	間くように親の命令をよく	しつてを厳しく
3 - 5	8	5	—	—	—	1	1	1	—	—	—
6 - 8	53	21	2	2	2	4	4	6	4	11	3
9 - 11	48	31	5	5	—	1	1	2	2	5	2
12 - 14	13	8	1	1	—	—	—	1	1	1	1
15 - 17	「父兄懇談会記録」に記載なし。										
18 - 20											
21 - 23	41	25	—	—	—	3	3	1	7	1	4
計			8	8	3	9	11	14	18	10	

父母の教育要求 (頁 4)

もまた、父母側からもおさつまつた。

しかし一般的には児童の教育の責任は教師に課せられ、内務省の十口より先生の一口に就すものはなし」とか、「荒テ、教育ヲ（如何ナル方法ナリトモ）教師ニ一任ス」とする場合が多かった。「父母の教育要求の表」にもみられるように、教育の問題について教師と父母とが対等の立場で話し合うのでなく、父母と教師のそれぞれの側からの要求は一方流通にとどまりがちであつた。そのかげには、「子守ばかりさせて勉強を充分させず先生に申訳がない」とあるいは、「忙しいのでどうしてもよく家にて候うので勉強さすひまがない」という父母の訴え（頁5）の本質を充分に教師によって理解されたかどうかの問題がある。その上また「子女は吾国のもの」とする国家絶対の立場、あるいは「教師児童の念を子供に植えつけられたし」とする教師の態度は、教育を父母から疎外するのを助長させたのではないだろうか。（頁6）

このように教育を国民の側におかず、国家政府側にのみ定着させ、その恣意に任せたことは、教育を軍国主義教化の重要な地位にまで至らしめることになった。昭和十四（一九三九）年五月には「青少年学徒三賜ハリタル勅語」が出され国家教育を一步前進させた。次に引用する「講話」と「教育経営努力点」に充分それが認められる。（頁7）

父兄懇談会講話要領

（資料 7）

- 一、青少年学徒に賜りたる勅語奉読
- 二、挨拶並に講話

(前略)

覆くも去る五月二十二日全県学生生徒代表御親臨式後文部大臣を宮中に召させられ青少年生徒に対し前刻奉読致しました有難き勅語を下し賜ひ、其の意を所を指示願ひされましたことは切に恐懼の至りに感へないところであります。謹しんで聖旨の存するところを拝察致しまするに凡そ青少年生徒たる者は幼稚園小学校より大学に至る迄男女を問はず感奮興起、謹んで聖訓に格闘して堅く其の本分を守り殊々の進退妨えを修め武を養ひ以て皇国民たる實質の鍛成に専心しなければならませぬ。私等教職に在る者は固き決意を以て躬行重範教育の刷新に努力し兒童の衣の内外に亘る全生活を通じて一貫した訓練指導をしてその人格を教化完成し以て聖旨に答へ奉りたいと考へてゐるものでございます。皆様におかれましては聖勅の御示しになつてゐます所を奉体下されまして御子弟の教育につきまして一層の御配慮をお願ひ致す次第であります。今回の支那事変以来教育はその全分野に於きまして戦時色に塗りがへられることを要求されて来てゐます。依つて本校に於ける教育も戦時色に塗りがへてゐる所固策に順応している戦後教育の施設の一端を申し上げまして皆様の御了解と御援助を請はす次第であります。

一 小学校

(一) 本年度教育経営の努力点

1 国体教育の徹底

資料 ⑤ ⑥

イ 敬神崇祖の実践、皇室尊崇の徹底

ロ 国運伸張に寄与する信念の啓発（帝國の世界的使命）（戒私奉公和衷協同の精神）積極進取堅忍不拔の気魄

ハ 忠勇義烈なる殉国勇士並に出征兵士への追慕感謝の思念を養ふ

ニ 國家産業向勤勞奉仕等統制奉仕の實踐的訓練

2 科挙教育の重視——理科教育の振興

3 体育の振興——体操、朝会ラジオ体操、小運動会、健康教育の向上

4 教育的刺激の付与（体験的教育）

「知育」朗読会、書版焼成会、読書幽光会出品、暗算競技会、時局室の経営、月曜講話、学級

経営上の留意

「徳育」大国民的態度の馴致教師室範

(二) 戦時国策への協力

1 国民精神振動員の強化——総努力を皇國に献ぐ

2 消費節約、資金励行

児童四月よりの貯金高二六二円〇五、月平均

八七円三五、学用品の節約

課税、古物使用、新調差控へる、百億貯蓄に協力

(三) 実践鍛錬の教育

盡忠報國の精神を体得しえを実践躬行せしむるは我が國教育の真訣であります。之が発揚には鍛錬教育に依り実践力を強化し堅忍持久生成発展の気魄を養ひ礼

前規律を重んずる訓練を実施する要があります。

1 寒田勤分作業

2 武道実施（等五以上の男子 剣道：：木刀、柔道：：
棒、毎週三の分二回）

本年五月二十九日文部省訓令第十六号を以て小学校
武道指導要旨を制定、児童心身の養成を図り更に国
民たるの人格を陶冶する趣意

3 夏季及冬季心身鍛練

○ 休養——これが暑休みに対する従来の観念であつた
が、時局の緊迫がかかる平時的な観念を打破し寧ろ
心身鍛練を旨とすべきであるとされるに至つたので
あります。文部省の通牒「爾今、業を休む」の観念
を捨てて「心身鍛練」の本義に則り……全期間中
を通じて同辛みで尊厳化に力を致し」とある。

○ 目標「雄渾の支那と強健の身体とを養成する」

実施事項

イ 集団勤分作業

ロ 軍事訓練

ハ 武道其の他行的修練

ニ 諸運動

ホ 山野散歩

の期間 休業日数の二割 即夏休み二十日間、冬休み

十日間

四 父兄会の懇談方法

1 自己の子弟を知れ

2 それには他児童と比較考察する事に於て明瞭にな
る

3 又一学期成績グラフにより担任教師と深く相談せ
られたし

4 特に中等学校へ入学させたとき考へを待たれる父兄
に於て特に注意されたし

三 青年学校

青年学校教育義務制実施につき、出席率向上を促す
児童教育上必争事項

1 教育は学校教師 児童、父兄、三位一体で成る口
効果を奏せず 家庭との連絡を望む

2 家庭教育 暖方

ナポレオン「小児の将来の運命は母の働きによる」
ヘルバルト「一人の良母は百人の教師に値す」

イ 我儘を矯めたい……将来の就服上

口 働くことに対して確固たる信念を待たせたい

「働くことが人類存続の基であり」「好箇の修養
である。

「教思慈愛であり最高の楽しみであり」「救してあ
り」「働くことそれ自体が目的であり」「使命であ
る」といふ確固たる信念と自覚を涵養されたい。

ハ 事に當って注意力、研究的態度を培つて臨ませたい
学習的態度がそのまま人類生活の縮図

ニ 情操豊かな人物たらしめたい。

従つて形式に囚はれたり、或は規則一点張で人情味

の乏しい儘か味のない人は困り者であり、

ホ礼儀作法の精神を確證せしむ。

「愈々すべきところを出しやばったり、無作法にな
り、にり、愈々すべからざる場合に出たりたり、は
にかんざりする事が多いのである、すまいか、
へ、愈々せよ戒めたい、

悪事をなす者の大多数は虚栄心に原因することが
多い、自己の現在の身分に満足を感じせしむるこ
とを教へる、さりとて勿論向上心を失はせるやう
ではならぬ、

一 宗教的信念を養ひたい

こうして教育は、国家に順応し、戦時体制に転換すること
を口をきりて説明し、「清く正しき心」と、「強き勇健」とを
兼ねた「勤きある人柄」を養成する日本臣民を養成するこ
とが児童教育の方針としてかけられはじめた。

学術系（三月）に行われる学芸会の演劇の題目にも「時局
味アルモノ」として、「隣組常会」、「戸籍中在」、「軍國の父」
「一徳一心」、「戦陣の春」、「兄さんの入宮」、「慰問袋」など
があげられ、昭和十四年度学芸会「昭和一五（一九四〇）
年三月」演劇も「僕は少年陸軍兵」、「出征兵士を送る」、「紀
元二千六百年前歌」、「天降さんよりかとう」などが上演さ
れた。昭和十一（一九三六）年頃までは理科実験、朗読、歌
謡、演劇、競書、写生など教科全般にわたっての学習発表で
あったが、以後学芸会の題目は演劇と唱歌だけに限り、しか

も「時局味」豊かなものが多かった。

運動会 また秋季十月の運動会は、小学校、青年学校、高
年団および軍人会の聯合によって挙行された。（資料一）「一同
整列し敬礼し国旗掲揚し君が代合唱し奉安殿参拜し開会の辞し
運動会歌合唱し一同敬礼」の順序で開会式が行われる。「規律
正しく、全校統制が気持よく、取組の一致と児童の協力、運動
競技の精進、責任を重んじ公正に、衛生に留意して鍛錬的」な
どを運動会奥組の看板として個人、団体、各種の競技が行われ
た。次に昭和一〇（一九三五）年度聯合運動会の競技種目表（
資料九）と「感想」をあげておこう。（資料一）

秋の収穫の前のどかな一つときこの様子を知らることができよ
う。まだこの昭和一〇年前後は青年学校の「教練、武技競走」
軍人会の「かわらけ破り」などにわずかに戦時色が見られる程
度で、リクリエーションの趣が強いものであった。

感想

（資料一）

天気も朝からカラリと晴れ上って、絶好の運動日和であ
る。秋空高く渡る万国旗、大地を鮮やかに区切る白線、早く
も場内に響き渡るピストルの音、天にも地にも響くの色が
満ち溢れてゐる。午前八時四十分、一同ユニフォーム姿も勇
ましく入場、敢かな開会式を終って合同体操を反切りに愈
々運動は開始された。今日こそ晴れの日、日頃の操縦を感
覚なく発揮すべき日、一同の面は希望に輝いてゐる。プロ
グラムの進むにつれて、一夜は一夜より牙え、熱気と熱気
息気は愈々高調してゆく。一技終る毎にドンと鳴る拍手の

嵐、禪香も禪香も思詰る様な緊張裡、ボカ／＼とした小春
日和に誘はれ近仰の老若男女、我落日差しつつめかける。
人のごわめき、器びの焔、蠶食前には手のない視聽扇がす
っかり人の夜に埋め盡され、突に素鵲しい盛況であつた。
かくて午後五時、夕陽面に傾く頃、大盛會裡に其の幕を閉
じた。

少し長いが次に引用する運動會の目的、運営方針も、純然た
る教育的見地にあつて、スポーツ精神を表明している。しかし
これもしばらくの間のこと、競技種目の中には、どん／＼と
時勢味をもつたものがとりいれられるようになり、学校教育の
あらぬる場を軍国主義教育に傾かれていき、戦争拡大に協力し
「銃後の守り」のための教育と化す、これを明確にしたのが、
昭和十六（一九四一）年三月の「国民学校令」および「国民学
校令」および「国民学校令施行規則」であつた。

運動會

（資料 9）

一 運動會は學校ニ於ケル体育生活全般ノ陶冶ヲ目的トシ
テ經營サレ而モ又ラ村民一般ニ発表シテ以テ目的達成ノ
機縁トスルニアルヲ以テ生活ノ全面的陶冶ノ立場ニ立ツ
ハキモノテアツテ本校運動會經營ノ根本意義ハ次ノ如ク
テアル

- 1 自己作証ノ自覚 自己ヲ知ルニヨリテ発展アリ自己体
位ノ自覚ハ即ち地位向上ノ努力トナル
- 2 地位ノ向上 單ナル練習ノ結果ノ外見的発表ニ止マ

ルコトナク体育ノ
眞意義ニ即シ兒童
地位ノ向上ヲ懇ト
スル營々テアリタ
イ。

3 体育発表ノ機会
トシタイ

発表ニヨリ体育
ノ相互研究ハ深ク
ナリ未練者ノ批判
ヲ得テ反省シ次テ
今後ノ方針ヲ定メ
ル機会トナル

4 健康ヲ感謝シ礼
儀ヘノ機会

ヨク伸ヒタ股体
内整ノトレタ四肢
剛健ナ骨格ト柔軟
性ニモツ筋肉ハヨ
キ健康ノ象徵ナリ

5 運動精神ノ陶冶
規律協同 自律
快活 忍耐 剛毅
果敢 奮闘 勇氣
恭敬 公正等ノ精

	個人競技	団体競技
尋常科	徒歩競走、おちつりて、あそびだろ ま、縄飛競走、障害物競走、登校競争	競技、体操上下紅白、体操民衆行列重、飛行機 体操及競走、遠戲ヒダシ、蹴球競走、桃太郎、騎く り、七夕祭、銀鼓の一線、女の王冠
高等科	徒歩競走、段高競走、千変万化	
青年學校	武裝競走	教練
青年團	俄端、俄裝競走	
軍人会	かわらけ破り	軍人リレー
その他	通字団リレー、綱引き、合同体操	

神ノ陶石ト発揮ノ機会ヲラシメタイ

6 社会生活ノ陶冶 運動会ガ児童ノ協働自石 相互共

助ニヨリ營マレ協同社会人トシテノ生活陶冶
ノ機会トスル

二 運動会ノ姿

1 自治協同 学校行事カラ児童學習生活ニマデ拡張サ

レ児童ノ自発創意ニヨリ營マセタイ 運動ノ実施ノ
計画準備実行ト整理反省ニ至ルマデ自治協働ニヨリ
ヤラセル

2 体育強調 生活陶冶、精神ノ陶冶テアルカシレハ体

力ノ陶冶ヲ中心トシテ營マレルベキデアル而モ運動
会ニ行ハレルハキ体操遊戯競技ハ細目ニヨリ平素指
導サレシ所ノモノテナクテハナラマ 運動会ノタメ
ノ趣味的ナモノ興味本位ノ面ハ敢テ非拒マル 而シ
テ当日ノ種々ノ記録ハ悉ク保存シ体育ノ資料レシテ
活用シタイ

3 興味化 学校体操ヲ生活化シ体育ト日常生活トノ近

接融合ヲ図リ体育ヲヨリ興味アル効果的ノモノトシ
タイ

三 種目ニ就テ

1 多方向的取材 運動会ハ学校体育全般ノ発表ナル故

多方向ヨリ取材スルコトニヨリ日常体育生活ノ全般
ヲ收入レ而モ全体的統制ヲ保ツベク考慮サレタイ
2 自力ニ適応スルコト 年令性別個人ノ各々ニ異ル体

位ニ応シタルモノテアリタイ 従来ハ余リニ一奇の
劃一的強制ニスキタ感カアル

3 合同集團運動ヲ多ク取り入レル事 コレニヨリ身体

的ノ効果ノミナラバ協同精神ノ陶冶ヲ図リ心身相
ノ鍛成ヲナスヘキテアル 但シ運動ノ態平ノ受シキ
モノハ考慮スル事

4 律動遊戲ノ重視 コレハ児童ニハ自然的テヨク サ

モノナレバナリ

5 体育の興味ノ考慮 興味ノアル處ニハ聲念心カ生ス
而シテ興味ハ外面的テナク感覺的テナク 内面的ナ
本質的ナ興味テアリタイ 賞状賞品ニヨル興味ハト
ラサル 自己体位ノ向上充實ト実実及運動ノモノ
ノ興味ニ感スルモノテアリタイ

三 経営ノ實際

1 経営ノ綱領

一 共同自治ヲ目標トシテ職員児童活動員ノ活動ニヨリ趣
味責任ノ下ニ協同工作ヲナス

二 体育及訓育ノ上ニ立チ生活ノ全面的陶冶ヲ目指シテ環
毛価値の効果を二大端スル

三 会全体ニ及リ得ニ規律歩調 出入精神緊張 段ノ花練
（個人―学校―全体）演技種目ノ精選等ニヨリ硬
式的ノ経営ヲナス

2 (以下略)

【片田国民学校】「国民学校令」にもとづき昭和一六（一

九四一）年四月一日より「片田尋常高等小学校」は廃止され「片田村国民学校」と改称された。国民学校に変わったのは単なる改称ではなく、この改革は滿州事変前後における国内の社会主義運動と農民労働運動の圧殺りための国体明徴というイデオロギー的整頓を行った「教學刷新評議会」の仕事を受け継ぎ国民を修練するための制度の確立という使命をもって「教育審議会」が設置された（昭和一二（一九三七）年二月）当初から計画された片田校での学校運営はこれらの「国民学校ノ精神具現」をはかることであり、この意味においての家庭および社会との協力であった。昭和一六（一九四一）年以降の「父兄会懇談会」における学校長の講話は「国民学校ノ精神」を父兄に説明するだけにおわり、学級経営の方針もまたそれに則るものであることが要請された（資料10）前年の頃より国民学校実施の準備のために、各教室前方には「宮城・神宮・アラビヤ印刷廠奉揚」を行い、昭和一五年（一九四〇）年夏の父兄懇談会と学芸会で中学校長が「国民学校」についての講話を行い、「皇國ノ道ヲ修練」するために、学校、家庭、社会、の「総力」をあげて子供を教育しなければならぬと強調した。尋常科の学級経営の方針にのみみられぬが、高等科においては明確に表明している。

学級懇談要領（高一）（資料10）

一 学級教育の方針

一 時局を深く認識せしめる為、時々時局に関する講話を

行う。

- 2 実力主義のもとにその個性の長所を伸ばし合入一歩一能に育てさせるために努力している。
 - 3 各種の教育制度を行いその実力の伸展を図る。
 - 4 皇道精神の養成の立場から奉安殿の奉拜、神社参拜、神棚の奉拜には敬虔の態度を以て行はせる。
 - 5 非常時局下の所謂戦時体制下に参加せしめる意味に於て公費を節約し、物資を愛護するの態度を確立し、且つ領土剛建の気風を養い、困難缺乏に堪へ得る意志と体力の養成に力を注ぐ。
 - 6 感謝の生活をさせ出征軍人の慰問とその労力奉仕に全備の努力をほしめる。
 - 7 心身両方面の鍛錬に留意し、二の國民として、児童を期すべく努力する。
 - 8 大國民の品性を涵養する立場から容貌の整正を期す。
- 二 概上より家庭への希望
- 1 学級教育方針に協力を望む。
 - 2 家庭学習にあつては一定の時間を定めて行わしめられたい。
 - 3 規律ある生活をせしめられたい。
 - 4 家業の手伝は充分行はしめ且つその間に勤勞愛好の精神を助長せしめられたい。
 - 5 学用品、金銭については充分その用途を明らかにせしめられたい。

6 表飯の奨励 水泳の禁止、その他三、三、（以下略）

第四節 大平洋戦争と小学校教育

【国民学校教育】 教育の純潔たる戦争化である国民学校制度の確立により教育は国防教育そのものに化した。そこにはもはや学問の自由も教育の独立もなく、人間性の発展はとうてい望まれるものではなかった。（資料10）好戦的な愛国心、戦争の賛美思想、軍人崇拜、平和および平和主義の誹謗、排外主義など、およそ、戦争遂行の上に都合のよい迷信、偏見、教義、感情などが、いろいろな形をとって子どもに注ぎこまれた。昭和十六（一九四一）年一月八日、大平洋戦争が始まり戦線はますます拡大された。戦争が出征者に少しばかりの警備をもたらしのと引きかえに家庭を破壊し、親と子とをひきこき、貧困をもたらしことになっても、多くの人は国家統制をうけている各種のマスコミ・デモンストレーションによって作りだされた勝利の幻影におぼれて、村おろゆる教育は、政治的統制のもとに戦争協力に動員された。

昭和十七年度の小学校教育の概況について、「安藤部片田村事務報告書」の中では、つぎのように報告されている。

学校教育

昨年度ヨリ国民学校制度改革ト共ニ国民学校令オ一系ノ趣旨ヲ体認シテガ目的達成ニ懸命ノ努力ヲ傾注シ来リ教科書改訂ニ伴フ教科書ノ購入整頓ニ或ハ教科訓練養並ニ地位ノ向上等ノ研究奨励ニ全職員一致協力シ其ノ成績向上ニ昨年度ヨリ一段ト

努力ヲナシ一面大東亞戦ヲ勝ち抜クベク必勝ノ信念ノ涵養ト之ガ目的完遂ヘノ協力トニ留意シテ貯蓄ノ増進ト奨励ノ購入等戦時下教育ノ充実ヲ図リ是ガ運営ニ完璧ヲ期スル為毎月定例職員会以外ニ毎朝職員朝会ヲ開催シテ勸告ヲ奉納誦シテ聖旨ヲ奉読シ教育精神ノ強化徹底ヲ図リ此レヲ基礎トシテ其ノ日ノ行事訓練等万般ノ場合ヲナシテ学校経営ニ邁進感ナキヲ期シ以テ国家ノ要望ニ添フベク懸命ノ努力精進ヲ致セシヲ以テ学校経営ノ実績大ニ向上セリ。

家庭トノ聯絡

学校教育ハ学校家庭児童ノ三位一體トナリテ初メテ其ノ與關ヲ上カルモノナルヲ以テ家庭トノ聯絡提携ハ最も緊要トスル所ナリ依ンテ日常エガ聯絡ニ努ムルト共ニ月父兄母姉会、十月ニ運動会三月ニ学芸会ヲ開催シテ教育ノ實際ヲ親レ且ニ懇談ヲナシ又卒業児童ノ進路ニ與シテハ適宜懇談並ニ幹事ヲナス等児童ノ現在並ニ将来ニ亘リ注意ヲ促セリ

また同じ年度の「児童保護者会議要項」によっても、戦争遂行のための教育であつたことが明確になろう。

（資料10）

一 昭和十七年度児童保護者会議要項
本日児童授業ノ従来ト趣ヲ異ニセン矣

詔方並児童教科ノ習熟判定ノ實際

二 国民学校経営オ二年度進展ニツキ

1 昨年度ノ検討

2 本年度ノ進展

イ 皇國民鍊成ト知恩節心身一体ノ修練道場ノ充實
 ロ 国民学校児童ハ如何ナル生活態度ヲトルベキカ ↓ 成績
 例修身

ハ 大詔奉戴日ノ行事ニ付
 ニ 修身日制定実施ニ付
 ホ 出光会出品制限

三 家庭生活上考慮ヲ要スル点

1 喫煙實行……習慣トナル迄
 2 家庭学習ノ様式……自主修練
 3 洋傘使用禁止
 4 節約実践ト資源愛護
 時局
 則志

5 貯金債券ノ購入 半紙一八四枚五円紙二枚
 貯金月平均五十銭以上

特(一四)別費券(巨額券)

健康
 皆達
 6 学校伝染病ト出席停止
 ハシカ、耳下腺炎
 7 肝油トロップ服用ト健康

教育の軍國主義化、いかにせよ、皇道精神注入のための用具化は、固定教科書の内容、況日、大詔日の儀式をはじめとする各種学校行事などの形式面だけでなく、教師の意識の中にもしっかりと定着して確実なものとなる。初等科三年生以上の児童によって、「少年団」が組織され出征兵士の見送りから、慰問文、慰問画などの送付、国防献金など「戦後の復讐強化」がお

おしすすめられた。(資料12) 教育の全領域において、軍事的基礎訓練を受け、青年学校における軍事教練によって「皇國の兵士」の素地がつくられ、「出征」したのである。そして再び生きて帰らぬ青年のいかに多かつたことか……。

【教育の破壊】 軍需物資、生活物資の欠乏から「資源愛護」が叫び、村内から「金属回収」が度々行われ、寺院の鐘鐃、仏具の引出をはじめ、各家庭からは金属製品、旧貨幣までも集められた。戦局悪化にともなう消費物資は配給制になり子供の学用品も不足を極めた。

次にあげる「昭和一九年度学校行事表」および同年度の「父兄会校長挨拶手帳」によって、戦争末期の学校教育の情況が知られる。(ヒ五頁参照)

子どもには、毎週の「時局講話」によって「鬼畜米英」「米英壁紙」のローガンのもとに、国防意識、民族復讐意識、絶対意識が吹灌され、「キントカツ、ガマンス」(昭和一九年度初等科一年級訓)の正と、幼い心に自覚を強制された。悪化する食糧事情に対処して、家庭は道路を狭くして、教師と子どもたちによって兩壺され、甘藷の栽培が行われた。教師と子ども達が毎月神前奉仕を行い、神社に参拜して、戦勝を祈願しようとも、戦局の悪化はいかんともしがたかった。

昭和一九(一九四四)年頃より郡市部への空襲が激しくなる。村内への疎開者の転入がはじまり、その子弟の転入学のため「昭和二十年度児童数増減表」および「戦戦前後児童数増減表」に明白な如く児童数は急激に増加する。教科書の不足、学用品の窮乏などは子供の修学上に大きな困難をもたらし、これが

昭和年次	児童数	校 数	入 数	出 数	年 度 末 年 間 一 年 間 一	年 間 一
16	411	1	1	1	424	4
17	423	1	1	1	379	4
18	399	3	1	1	375	4
19	385	18	5	5	409	14
20	416	?	?	?	471	55
21	465	?	?	?	451	14
22	360	?	?	?	357	3
23	373	?	?	?	372	1
24	344	?	?	?	341	8
25	361	?	?	?	357	4
26	357	?	?	?	351	6
27	337	?	?	?	336	1

移動不明、16年度2、18年度6、19年度
1名、22年4月1日高専科廃止
片田尋常高等小学校「月末統計表」による。

昭和前期児童数推移表

- ② 片田尋常高等小学校「父兄懇談会記録」(大正五年起)
③ 片田尋常高等小学校「父兄懇談会記録」(大正五年起)
④ 同各学年父兄懇談要項
⑤ これら父兄の要望口、父兄

にもまして学習を妨げたのは、あいつ々警戒警報であり空襲警報であった。教育の戦争への従属と奉仕は教育自体の否定でもあり、徹底でもあった。一語戦争指導者の怒号する。「本土決戦」、「一億玉碎」も空しく、遂に昭和二〇年八月十五日、敗戦へと追いこまれた。

註

- ① 片田尋常高等小学校「父兄懇談会記録」(大正五年起)
所収、昭和三年度卒業会(昭和四(一九二九)年三月)におこなわれた「学校長の父兄に対する懇話要項」
② 同、卒業会予行練習における「学校長の実施前に対する注意」

昭和年次	初等科						高等科		合計	一学年平均	昭和前期
	1	2	3	4	5	6	1	2			
4	55	56	65	49	51	49	51	40	416	52.0	7
5	55	58	65	49	53	49	51	41	421	52.6	5
6	55	57	65	48	53	49	53	41	421	52.6	0
7	60	63	70	57	56	54	58	41	459	57.4	36
8	62	81	87	73	75	67	66	43	564	70.5	135
9	68	72	82	61	72	64	63	43	525	65.6	37
10	62	66	81	58	64	61	62	43	502	62.8	23
11	61	65	76	59	69	60	61	42	493	61.6	9
12	63	65	77	57	65	59	60	42	488	61.0	5
1	61	65	72	55	64	57	58	42	474	59.3	14
2	62	64	73	53	64	56	59	42	473	59.1	1
3	60	64	73	53	64	56	59	42	471	58.9	2

(月末統計表後による)

昭和20年度児童数推移表

- ⑥ 同記録所収、昭和一〇(一九三五)年前後の各学年父兄懇談要項に記されたものである。
⑦ 同記録所収、昭和一四年度父兄母姉懇談会記録(昭和一四(一九三九)年六月に記されている)。
⑧ 片田尋常高等小学校「運動会記録」(大正四年一〇月紀)
所収の「昭和一〇年度片田尋常小学校、青年学校、青年團、連合会聯合運動会記録」による。
⑨ 片田尋常高等小学校「父兄懇談会記録」(大正五年起)
「才二編」一収の「昭和一六年度父兄会懇談要項」
⑩ 国家主義的教育体制下において児童の自発的学習方法を強調された現象については「国民大衆が政治的力によって巧歩

に操作されて、いわば自発的に、权力の意志に盲従させられ
おどらされるように、子供たちもまた教師に巧妙に操作され
て、いはば自発的に、教師の意志のままに学習させられる」
と把握されている。(毎根悟「教育内容と教育方法」―教

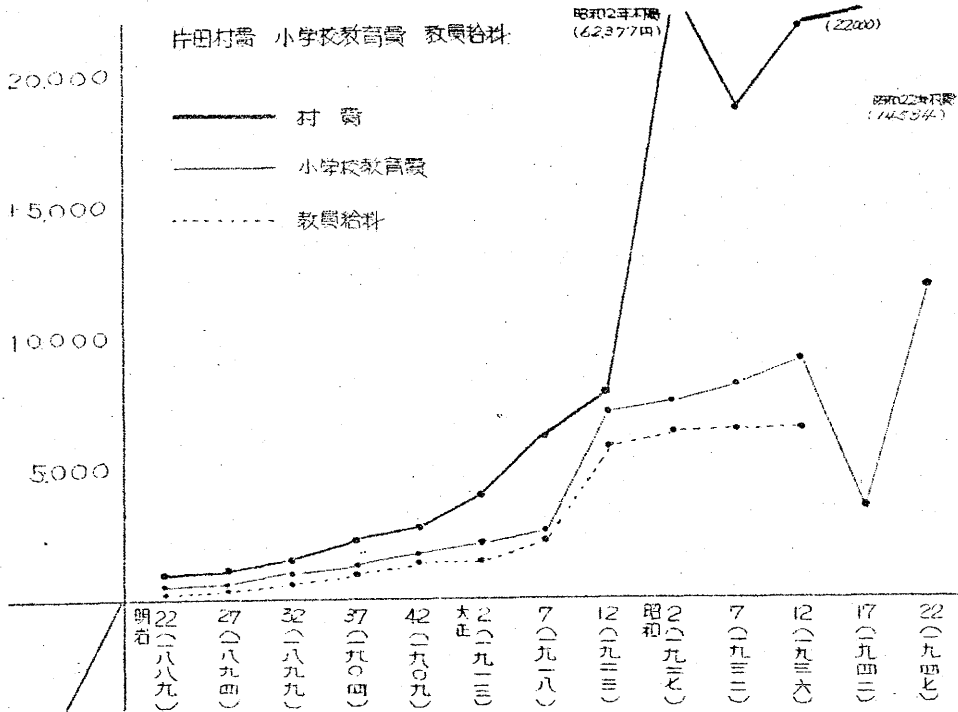
② ① 育評論90所収)
同記録
後述「第四章社会教育の諸団体

才一節青年団」を参照

生活指導	作業訓練	校内研修	校外研修	その他
時局講話 月曜講話		職員会 —	勤労動員打合会 商賈の打合会 製菓講習	
徒歩運動 毎里記念日講話		職員会 取組作業	整図講習 会計打合会	
少年団常会 時の記念日講話		職員会 研究会 取組作業	袖岸訓練 水泳講習	
時局講話 少年団常会 文相奉安記念講話 月曜講話 心身鍛錬		研究授業	貯金奨励協議会 水泳打合	父兄会
学校常会 行軍 行軍水泳 月曜講話			養蚕打合	
学校常会 時局講話 航空記念日講話			征空体操講習 砲台訓練	
時局講話 体操大会 靖国神社臨時大祭につ き講話		研究授業	武道検定章講習 馬車講習	村社大衆 役農青年会
時局講話		研究授業	女教養習	
振興日講話 時局講話		職員常会 取組作業		
学校常会 時局講話			女教養常会 政道講習	
学校常会 学校常会 少年団常会 毎里記念日講話 時局講話 開校記念日講話	高等科児童日語 語法作業			

(戸田常高小中学校「月末統計表」による)

	式	興	神 事 仏 参	児童会表会	衛 生
四 月	入学式' 始業式' 告别式' 新任教 大詔奉戴式' 靖国神社臨時大祭参拜 式' 天徳節拜賀式'		神社参拜		
五 月	恩返祭 賞状授与 花 祭		神前奉仕 大詔奉戴日神社参拜		
六 月	勸業授与		神前奉仕 大詔奉戴日神社参拜 神社参拜	高取多香	
七 月	勸業授与		神前奉仕 大詔奉戴日神社参拜 仏参		
八 月			神前奉仕 大詔奉戴日神社参拜 寺院参詣		
九 月	偉人祭 勸語奉読式'		神前奉仕 大詔奉戴日神社参拜		
十 月	勸語奉読 偉人祭 勸語下賜記念日		神社参拜		
十一 月	明治節拜賀式' 偉人祭				
一 月	拜賀式' 始業式' 辰巳日奉読式'		大詔奉戴日神社参拜		
二 月	大詔奉戴日奉読式' 和元節拜賀式' 偉人祭		神前奉仕 大詔奉戴日神社参拜 英愛奉仕		
三 月	祖父節 奉読式' 修了式' 少年奉仕行会 修業式'		神前奉仕 神社参拜 英愛奉仕 戦没軍人墓参り		



(小学校一覧表および片田村会計表による)

第五節 敗戦後の学校教育

【軍国主義教育の排除】 昭和二〇(一九四五)年八月十五日日本は連合国のボツダム宣言を受諾し無条件降伏をした。以後アメリカの領土を中心とする連合軍の進駐が開始され、連合軍司令官マッカーサーの命令により、教育は行政、内容など全般にわたって大きく変革された。服従という今までかつてない事態は「国策遂行」に全力をあげて努力してきた人々を一瞬にして虚脱状態におとし入れた。これまで児童生徒に「ガンバロー・ガンバロー」と叫びまわって勝利の日を願った教師の中には心の揺れを感じ、恥辱を去ったものさえいた。敗戦後教育行政の面で明らかに考えられたことは①「或るバク吏ニ平時ノ授業状況ニ従スルコト」(「時局ノ急転ニ伴フ学校教育ニ関スル件」昭和二〇年一月)であり、「戦争終結ニ関スル記書ノ精神ニ鑑ミ」て適当でない教科用図書は次のような基準に基いて廃棄されねばならないということであった。

(一)「終戦ニ伴フ教科用図書取扱ニ関スル件」

(二) 国策軍備等ヲ強調セル教材

(三) 戦意昂揚ニ関スル教材

(四) 国策ノ和親ヲ煽グル或レアル教材

(五) 戦争ノ終結ニ伴フ現実ノ事象ト著シク齟齬シ、又ハ今後ニ於ケル児童生徒ノ生活待遇ト著シク遠ガカリ教材トシテノ価値ヲ減損セル教材

(六) 其ノ他承認必置ノ点ニ鑑ミ適当ナラザル教材

そのうえ新たに教材を採択する場合には、よく見て「国体護持道義確立ニ関スル」ことが第一に必要とされていた。これ

らることを田舎に行うために、早急全教科目ニツキ各学校ニ於テ又ハ教科聯合シテ具體的調査研究」を要望されていた。(前出市誌)にもかゝつて本校単独で、あるいはまた安藝郡内聯合による「教科書修正研究会」(同年一月)がもたれた。その結果一部分を望で與にとめり消され、其のほかに削除された教科書が使われることになった。一般に「軍國主義」排除を口にするのと、つらばらに「民主主義」が叫ばれた。府合軍最高司令館はこれまでの日本の教育や文化のうちで大きな位置を占めていた。「軍國主義的及び極端ナル國家主義的イデオロギー」の排除に主力をそそぎこんでいた。

児童・生徒の心に神話伝説を史実とし、神國思想と軍國主義をふさぐ道義とされてきた「修身科」、「國史科」をはじめとして「地理科」は二一(一九四六)年一月より、その授業を停止することになった。これから三つの教科および教師用圖書は回収され、母四や母朝は取り替へられるが売却されるかした。しかしまだ「紀元節」、「天皇節」、「明治節」などの儀式行事はそのまま継続されていた。

戦争による各種産業の統制は生活物資の不足と食糧争奪をますます悪化され、児童の学習用品も全く乏しくなった。二一年(一九四六)八月全面的に旧教科書の使用を禁止されることになったが、新に配布される教科書は猶もなほかりでなく、その上不足勝ちであった。児童数は都市撤収者の村内疎開によって、増加してきた。特に敵戦直前の津市への空襲、教員の不足など、一学級の児童数を急激に増加させ、定員(初等科六〇人)

高等科五〇人)をはるかに越えていた。そのために授業はなかなか「平時」に戻らなかった。

食糧増産のために校庭は今まで通り圃場となっていたが、同もなくもとの「運動場」に戻された。また軍國主義教育の一つの精神的よりどころである天皇の「御眞影」の撤去されていた。奉安庫も昭和二一(一九四六)年五月三日の撤去された。

敗戦直後の教育政策によって、教育の全領域から天皇を眞象とする軍國主義教育の要素が次々に除去されてくる中で、民主主義的教育の形成が始められた。教師自身も、自分達の生き様の確立、教育の民主化、および平和國家建設への参加などを目標とした三重県教員組合を結成した。(昭和二一(一九四一)年一月)。

ここに教師は自分等の生活と教育の問題を相繼によって考え、実現して、すぐれた教育の確立をめざすことになった。

【片田小学校】昭和二一(一九四一)年一月三日には平和と基本的人権を明示した日本國憲法が公布され、ついで同年二月には六・三・三・四の教育制度が発表された。やがて翌年四月一日には「三重県安藝郡片田村立片田小学校」と改称された。これまでの天降りのな「教育勅語」にかわって、新しい日本の教育のよりどころになる「教育基本法」、「学校教育法」が頒布され(昭和二二(一九四七)年三月)、学校教育は新しい教育課程にもとづいてはじめられた。そのため同年五月の「新教育研究協議会」(於一員田)には片田小学校の教師も全員参加し、また「新教育各科講習会」などを受講して新教育への転

候を行つた。

【片田中学校】 九ヶ年義務教育が規定され六・三制の発

足により 片田小学校内に「片田村立片田中学校」が併置されることになった。昭和二二（一九四七）年五月一日 開校式が行われ、それまでの小学校高等科の生徒が編入された。やがて、新制中学校再配置の協議が協議され、津市立西郊中学校片田分校」となった。後には、津市立穂内中学校片田分校」と変更されることもあつて、中学校生徒は津市と片田村との協議にもとづき、それぞれ津市に委託されていた。昭和二五（一九五〇）年 津市立西郊中学校が津市安東に新築されることになつて、村内の中学生は村外通学することになり現在に至つてゐる。この校舍新築に際しては、中學生生徒の委託のこともあつて、建築費五〇万円が寄附されている。②

【新教育への対応】 新しい教育制度と教育については昭和二二（一九四七）年と月一日の「父兄懇談会」において、出席した父兄に学校長が説明している。

父兄会講話

○教育の目的 どんな子供に育てるか

今まで旧教育勅語がすべての教育の根本でありました。そして国家を最も大切なものとし、国民は国家の発展のために命もすてなければならぬと教へられたのであります。戦争にまけてよく反省したとき、これが誤であつて、勅語は教育の根本としては不適当と認められ、それに代つて教育基本

法と学校教育法が国会で可決されたのであります。それによりますと

教育の目的は

子供が生まれながらもっている人間としてのよい性質を、
力加めぬいでのほして、平和の国家や社会をつくる国家
を養成せねばならぬ、
と示しています。

人間は子供も大人も正邪、善悪、美醜を判断し、たえず正しいこと、よいこと、美しいものを望んで生活をしてゐます。然し子供はこの判断力も望みも大人より弱いものでいわば二乗の芽生であります。丁度一つの種から芽を出した畝のようなものであります。これに肥料をやりいろいろの害になるものをとり除き世話をしてゐる内に立派に成長して花がさき実がなるように育てなければなりません。これが教育であります。

世間人間のために実をならすのでなく、畝の平順であります。子供は教育によつて生まれた本性をのびすので、何も国家のためや親のためにその本性をのびす学問をするのではないので、どこまでも自分の一生がよい実を結ぶように勉強するのであります。

畝のよいがるものをやり、いやがるものをとつてやる事と同じ仕事をすること、教師や親の仕事であります。

○本校の目標は

そこで本校におきましては先生方と相談の結果、子供らが毎日楽しく学校へきて明るい気持ちで生活させることを目標とす

ることに決めたのであります。子供がいつもここにこゝで学校へきて、うれしそうに家へかへる様子を眺めたいというのが本校の全員の希望であります。

どんなことに気をつけるか

○そのオ一は、何でもまづ子供にやらせて見ることであります。

子供は自分の力でそれ相当のことを考へるのであります。

子供は何か出来ないものとときめて一から十まで教へていたのが今までの教育でいつまでたっても自分の力を表わすことが出来なかったのであります。人にたよる心が強くなるばかりで子供の力はいつまでたってもつかないだったので、これが日本の戦にまけた大きな原因であると思ひます。

こう申しますと、何でも子供に考へよ、／＼と云つて教師は何もせずに居て居るのかと云われるかも知れませんが、

それはいけないのであります。子供が自分の力で考へて見ると力のあるものは次々と新しいことを見つけて行きます。力のないものは手伝つてやる。これが教師の大切な仕事であります。これから学校では子供が自分で研究する時間を多くし、教師は子供の相談相手になつたり手伝人になつて、自分で考へる力を付けてやらねばなりません。

子供の樂けの方面でも同じであります。

今までは教師や親が自分の氣のあくままに、いろいろのこゝとを強制的におしつけたのであります。隨つてしつかけのよい子供といへば大人を小さくしたようなました子供をいっただけであります。子供にはのび／＼した無邪氣がなければなりません。

新しい意味のしつけは子供の良心の判断によつて行動させずとも正しいとみとめる行いをさせることであります。

最近では自由／＼といつて子供が本能のままに善悪の区別なくすることがあり、而もそれに偽意を与えることは子供の人格をきづつけるものと考へてゐるものがあるようであり、またこれがいけないのであります。誰か考へても悪いと考へることはやつてはいけないのであり、またやらさぬようにするのが良けであります。

例えは

手をあげるときはどうするといふかと子供に考へさせ相談の結果ハイハイと何回も云うことは他人のじやまになるからハイと一回だけ云うことにきまつたら、必ずその通りやる責任をとらねばならないものは徹底的に注意することが大切であります。責任をとらせることが社会の秩序を保つ大切なことであります。

オ二は友達と共に一つの社会を作つてゐる以上その中の一人としての責任を果して行くことであります。

子供が自分の力で考へたものはまずいことがあり、まちがっていることがあります。それで自分の考へたことをほつきりときいてもらへるようにならねばならないことが必要で、そうすることが他のためにもなり自分のためにもなるのであります。子供はどんなにまづくても人の前でそれを話す他のものはそれを正しくさき、それについて意見をいう責任を果すようになります。ここに話合が行われるようになり最初の子供の発表したまづい意見は次第に正しいものに訂正

されて行きます。教師は子供の割合がうまく進行するように能をとって行く役目であります。

つまり学習は一の学校の子供が、お互に義務と責任を果す生活をつづけることによって進んで行くのであります。

例 初三 学用品を買ったところ

行儀の方面でも子供各人が大勢の中の一人であるという気持ちをもつならば人に迷惑になることをしたり無作弄なことば決してしないようになると思います。自分のしたいことは人もしないのだと思へば我がまま勝手は出来なくなり、人に譲る気持ちが出来て教養のある子供が出来ると信じます。オ三口 勉強は毎日よい生活をするのであるということです。

今まで勉強というと学校へきて教室で先生に本に書いてあることを教へてもらうことであると考えられていましたが勉強するところは教室でなく、廊下も運動場も実習場もそうです。家庭も社会も皆勉強場であります。

先生は教える人ではありません。子供の相談相手です。案内役です。勉強することはいい生活をするので本に書いてあることはその参考にすぎないと考えています。例へば日語の勉強といへば、日語について本に書いてあることを覚えることでなくて、まづ日語をつくらせてよいものをもつ工夫をさせることそれが勉強である、という考えをもっています。

第四は、こどもの周囲を子供のためになるようにととのへること、きれいな所に居ればきれいなようになります、よく働く人

の中にまぎって居れば勤勞を好むようになる、よく勉強する友達と交ればそれに感化されます、とにかく子供の周囲にあるものも人も皆子供に知らず、よい影響を与えるようにしなければなりません。この意味で校舎の清掃と学校の気分をよくするよう努力してゐるのであります。皆さまにおかれましても、家庭や社会のよくなるよう御努力をしていただくことが同時に子供を教育なさっていることになるのであります。

(以下略)

(片田尋常高等小学校「父兄懇談会記録」オ三編)

戦時中「皇国民の養成」のための戦争教育にかりだてられた教師の同じ口から、平和のための教育が叫ばれた時、叫ぶ教師もそれを聞く父母も、戦争への深い反省なくしては、新しい教育も、新しい日本をも考えられなかったにちがいない。

新教育に対して、父母からは児童の学力低下(字を知らない計算ができない、日本の歴史上の人物や天皇のエピソードを知らないというような)を不満にもち、「現在新教育の方法は優良児と劣等児の差が甚しく感じられる」と心配し、「自由主義について子供は相当はさちがえてゐるから学校の方から正しく指導してほしい」、「もう少し子供に厳格にやっしてほしい」と素朴ではあるが功実な肉體が提起されるようになった。④ このような父母の教育要求を正しくとらえ、父母と教師とが協力して教育環境を整備し、また子供の教育の同願について要領に添

合える場としての、あるいはそうであるべき「PTA」が昭和二三（一九四八）年二月一六日結成された。

『片田村教育委員会』 郡道庁県、五大市などにおいては教育委員会はすでに昭和二三（一九四八）年に制定された「教育委員会法」によって、発足していたが昭和二七（一九五二）年すべての市町村にも一斉に設置されることになって、片田村にも発足した。この教育委員会は、国家や地方公共団体が自分に分合のよい教育を国民に強制するのでなく、教育のための諸条件を整備しようとするものであった。また、「教育が不当な支配に服することなく、国民全体に対し直接に責任を負って行われべきである」という自覚のもとに、公正な民意により、地方の実情に即した教育行政を行うために（昭和二三）年制定の「教育委員会法」第一条（設置されたものなるが故、それを構成する教育委員には公選制がとられた。このように教育のことは民衆の意思によって決する」という教育の民衆統制、地方分権化、教育行政の独立に立脚して、「教育本来の目的を達成することを目指す」（前同法）とされていたものであった。

十一月一日から

教育委員会が発足します。

十月五日の教育委員会委員選挙で次の御方が片田村教育委員会委員に当選されました。

四年委員 藤田 久

山路 清一
二年委員 白井 惇夫
上田 菱

議会から選出の委員は十月十五日の臨時村議会で選挙することになっております。前記四名の委員と議会から選出する一名の委員が来りますと村長は才一回の委員会を招集します。才一回の委員会で委員長と副委員長を選挙しますと、委員会が成立して事務局の取組を任命します。片田村位の村ですと事務局の取組としては教育長と其の他の取組一名計二名位になるだろうと思います。

委員会が成立し事務局の人員が整いますと実共に委員会が出来ます。すべての準備を十月三十日まで完了して、十一月一日から発足して片田村の教育行政一切を行うことになりました。委員会は月一回は開くことになりましたから此の招集は委員長がしますし会議の時には委員長は議長になります。

（片田村報）「才一六号 昭二七・一〇・二〇」

ついで村会からは、吉川若男氏が教育委員に選出された。昭和二七（一九五二）年十一月一日、教育委員会発足当初の構成は表示の通りであった。

なお翌六年四月、教育長には小学校校長宿野島一郎、同年十二月から教育委員長には白井惇夫、同副委員長には山路精一の諸氏に交る。

これまで村長のもとにあった教育関係の事務は、やがて昭和二七（一九五二）年一月二〇日、教育委員会に引継ぎされることになった。ここで云う教育関係の事務とは次のようなもの

であつた。

引継事務目次

校長、教員その他教育取員の保健、福利厚生に關すること（教委志才四九条一四号の内）

- 一 教取員の保健管理
- 二 福利厚生

小学校、中学校取員の任免その他の人事に關すること（教委志才四九条才五号）

- 一 取員定数
 - 二 取員の身分
 - 三 取員の採用、昇任に關すること
 - 四 取員の給与関係
 - 五 分限、懲戒、服務に關する事務
- 教科内容及びその取扱に關すること（教委志才四九条才三号）
- 一 教育課程の編成及び改善
 - 二 学習指導技術の改善
 - 三 教育資料の入手と改善
 - 四 学校図書館の改善
 - 五 評価技術の改善
 - 六 実験学校に關すること
 - 七 指導主事の助言と指導
- 教科用図書、採択に關すること（教委志才四九条才四号）
- 一 教科書目録、展示会要綱、需用紙の配布

考	編	任期	地区	名	氏	和名	氏名
出	村	2年	戸	井	夫	川	吉
長	会	4年	谷	志	一	井	白
役	人	4年	中	田	久	路	山
	助	2年	田	中	や	田	上
			中	田	男	田	原
							教

片田村教育委員会の構成（昭和27年11月1日）

- 二 教科書の選定に關すること
- 三 教科書の採択の決定
- 四 需要票の検討及び集計、送付
- 五 採択教科書発行中止の場合の処置
- 六 将来の希望

校長、教員その他教育取員の研修に關すること（教委志才四九条才一三号）

- 一 校内現取教育に対する援助
 - 二 公開行事と学校参観に対する援助
 - 三 研究の実施、記録、発表の援助
 - 四 講習会、主催又は講習会への派遣
 - 五 研究会の主催又は研究会への派遣
 - 六 研究生の派遣
 - 七 教師用図書室の充実
 - 八 指導主事の指導と助言
- 学校の保健計画の企画及び実施に關すること（教委志才四九条才一五号）
- 一 学校保健関係取員の援助
 - 二 学校保健運営組織の援助
 - 三 学校保健事業の企画と実施
 - 四 学校保健の教育計画作成の援助
 - 五 学校生活を健康的に改善するための援助
 - その他（学校教育法関係）
 - 一 学年及び授業日等の学校管理

またこれらの事務のうち、いくつかを三重県教育委員会に委託すること。昭和二八(一九五三)年二月九日の教育委員会々議において議決されている。そこで次に記す「委託に關する覚書」を同年二月十一日の教育長会議において取り交わされることになつた。

委託に關する覚書

一 委託事務の範圍

地方教育委員会所掌事務のうち次の事務とする。

- 1 学校教員の任免、給与、介限、懲戒に關すること。
- 2 学校教員の健康管理に關すること。
- 3 教科内容及びその取扱に關すること。
- 4 校長、教員その他教育教員の研修に關すること。

二 事務の処理方法

別記の通り

三 委託の形式 期間

地方自治法によらない委託とし、期間は昭和二八年四月三十日までとする。但し、前向高了の辭は双方の協定により研究する。右の通り覚書を取りかわし、その証として本書式圖を作成し双方捺印の上各自通達保管するものとする。

昭和二八年二月十一日

三重県教育委員会

印

三重県安濃郡片田村教育委員会 印

別記

- 一 学校教員の任免、給与、介限、懲戒に關すること。
市町村学校教員給与高了法一条による処置の任免、給与

介限、懲戒については、地方委員会の内申を尊重して県教育委員会において、従来実施した方法により原案を作成し、地方教育委員会は、この原案により、速かに発令の趣旨をこころしとする。

二 学校教員の健康管理に關すること

三重県公立学校教員の結核症に關する規定によるものとし、県教育委員会の指示により編纂するものとする。

三 教科内容及びその取扱に關すること

地方教育委員会の教育的精神的努力を条件とし、従来通り助言及び指導をなすものとする。

四 校長、教員、その他教育教員の研修に關すること

県教育委員会は、従来通り計画、実施するものとする。

このようになつて行われたのは、「三重県教育水準の普遍的な向上を希求する大局的見地に立つて、地方教育行政を推進するため、地方教育委員会は、県教育委員会にその事務の一部を委託する。(昭和二八年七月、委託に關する覚書)」のであるとされている。また、「両當の間に意見の相違を生じた場合は、県教育委員会が裁定に一任する」(前出書に同じ)として、地方教育委員会に対する県教育委員会の優遇が規定されているものであつた。この「県教育委員会の裁定に一任する」という但し書について、同年同月三十一日の片田村教育委員会会議において論議の中心であつたが、「郡全体が反対ならうしいがどうでなければ難しい……」ために、「承認しなければ仕方が無いでしよう」(片田村教育委員会議事録)と結論づけられた。よかつて「教育行政五」(昭三一年六月)の成立をみると、文

部省、部道、村景教育委員会、市町村委員会がはつきりと縦横関係に位置づけられ、教育の中央集権化、官制統制化が著しく強化される。それは教育委員会が公選制から任命制になることにより、民衆の意思の直接の反映が顕化され、教育財政についての教育委員会権限が縮小されたことによつて一層明確になつてゐる。

【二宮尊徳少年時代の銅像設置】 昭和二七（一九五二）年五月三日、片田村が県下の優良自治村として三重県から表彰されること、その賞金の旨意義を便説について、いろいろ協議された。村内全体には「片田村歌」を盛じて急遽募集として意見、案が求められた。その結果、翌二八（一九五三）年三月一四日「二宮尊徳少年時代の銅像」と小學校へ設置されることになつた。このおぼたの経過については、「片田村歌」に記されてゐるので、次に順を追つてあげておく。

村民の寄呈にお願ひ

五月三日自領優良村として表彰せられました事は御報告申し上げましたが賞金として一金五万円を頂戴しました。喜ぶ发布五周年でもあり調和発効の年でもありますので此の際何か意義のあることに費したいと思ひますので、村歌を通じて村民の皆様御意見を送りたいと思ひます。例えはこの金を基として村の基本財産を蓄積するとか、又調和発効記念のため図書館、馬場を作るとか其他色々の御意見があると存じますのでその御投稿をもとにして村議会に諮りまして実施したいと思ひます。

村の事業は従つて村議会の議決を要します関係上その決定権は村議会におまかせ願ひますが、採用致しました案の人には感謝を望みます。但し同一の案が多数の場合はいくじで当選者を決めま

してその人に御礼を呈上げますから猶々天山の人からの御投稿を御待ちします。投票の規定は次の通りとします。

- 1 宛 先 片田村役場
- 2 希切期日は六月一五日限り
- 3 用 紙 随 意
- 4 応募者 片田村の住民に限る
- 5 票箱は お返ししません
- 6 審査は村議会でする。従つてその決定権は村議会にあり衆を多少修正しても異議の申立はできない。

「片田村歌」(オ士号 昭二七・五・二〇)

表彰記念事業が決りました。

本年五月三日新喜发布五周年記念事業の一として、吾が片田村は三重県知事から優良自治村として表彰せられました事は六月号でお知らせ致しました。貝師賞金としてもらつた五万円の便説につき何か意義あることに費したいと思ひまして、村民一般から募集しました結果三名の方が応募せられました。

その応募せられた案を色々検討した結果、二宮尊徳先生の銅像を学校の玄関前に建設することに決りましたので、目下費場て其準備を始めておりますから近々二宮尊徳先生が薪を焼んで本を読まれているアノ勤勉の姿を思ふ事が出来ますと同時に吾が片田村から片田学校からオ二の二宮、オ三の二宮の尊徳先生の生れん事を心から祈ります。

「片田村歌」(オ一六号昭二七・一〇・二〇)

二宮先生少年時代の銅像建設所感

わが村が優良自治村として県知事から表彰された際に、銅像の供進案に就て審議の結果、賢聖二宮先生少年時代の銅像が小学校を隣に建設されることになった。事は真に喜びに感えない次第である。

近頃青少年の不良化が問題となり、その前途が憂慮されています。而してこれを防止し善導する途口多々ありましょう。二宮先生を手本として、先生の言行と教徳の教により各自に志を立てしめるのが最も安全容易な近道であらうと信じます。

抑々二宮先生の一生は悉く立志篇の連続であります。先生の伝記を読んで立志発憤して立身人となつた人は日本一の百世といわれた松本善作氏、昭和の尊厳翁といわれる梅村登氏を始め数限りない程あります。先生は貧賤の一農家に生れ、十歳内外の頃より父母を助けて家業を継ぎ、二十歳にして自家の家業を継承してから小田原藩の家老の家が僑附のために将に引れようとしていたのを救われたのが、はからずも藩主や幕府の認むる所となり、その恩恵により藩村教育、今でいへば新しき村作りに挺身して、東奔西走に窮乏する暇なき大活動なされました。そのお蔭で六百余の村が救済され、その中の二百何十村には一人の貧困者もなからしめられ所謂新らしい村作りに成功されたのであります。

尊王、封建時代の不平の世に於て、士農工商は各々その恥を世々にして敬重は階級分界を以て。時代に、貧乏は農家に生れてこれだけの大事業を成されたことは誠に驚嘆すべきであります。立心の手本とするに十分であると思ひます。更にその德行は生前既に野州聖人と称せられ、死後靈座は二宮報徳神社

として祀られています。最も偉大なる点は報徳哲學の精義をたる事であつて、元王自ら筆を執つて書かれた番書が九千十四巻あり、昭和になつて二宮尊徳全集として出版されたのが菊判千三百頁の本で三十六巻になつています。而してこの様な絶倫の大見識、大学向を一日も寺小屋にも学ばず、独学自習にて成就されたのであります。あの薪を背負つて歩きながら本を読んでいたられる家は先生の少年時代の勤勉にして向学心に感えた、いけない姿がほつふつとしているではありませんか。

「片田村報」(ハオ一八号 昭二八・一)

銅像建設について

わが村が優良自治村として県知事から表彰された前同敷した資金によつて二宮尊徳先生の銅像が近く建設されます。この表彰記念事業につきましては丘の方々の御助力があります。村民の皆様にお知らせいたしまして喜んで頂きたいと存じます。

1 村報を通じて募集しその採用者の方に感謝を呈する事に現程いたしました。処、採用案の片田谷口義見氏は謝礼を辞退されて美しい心を示して下さいました。

2 小野第一県会議員殿へ谷口義見殿の御兄弟の御協力によりまして青木知事殿に懸望を賜事に揮毫して頂戴しまして感謝いたして居ります。

銅像の石は津市石工秋田吉之助氏より寄附をうけました。同氏の尚書氣をばなれてこの建設に協力して下さいます事を喜んで下さい。

「片田村報」(ハオ一九号 昭二八・一・二〇)

除幕式は昭和二八(一九五三)年三月一日、三重県知事青

木型、県会議員野呂一、岡小野宗一、地方事務所長草原剛吉の諸氏をはじめ多数の来賓の参加を得て挙行された。戦前戦中の教育における理想的人間像の一つとされて来たる二宮尊徳が、再び「勤王力行立身出世」の遺像として子どもたちの前に示されたのである。それは以後片田小学校において継ぎられることになった「尊徳祭」の趣旨からも知ることができよう。

尊徳祭について

ここに本村が優良自治村として表彰をうけられ、その記念事業として小学校校庭に尊徳像建立の議が決定されて、去る三月十四日県知事殿始め多数来賓の御臨席のもとに除幕式を終了されました。本校の玄関に二代の経世永二宮尊徳の幼年時代の銅像を置き見ることは出来な像になりましたことは学校として誠に感謝に堪えない次第であります。学校として児童教化の中核したいと考え、毎月十五日を尊徳祭日とし銅像前にて苦勞かけしい尊徳讃歌をうた、左巻の禮徳を偲び、且つ児童中の善行善を表彰したいと思つてゐます。村民各位におかれましては児童の善行善を発見せられましたならば学校の方へ申し知らせ下さい。この佐し少しでも児童善導の役に立てば幸いと思つてゐます。

「片田村報」(第三号 昭二八四三三)「折収「小学校」より」

【国民教育のために】戦後直後の「国体維持」に力をつけてやがて登場した「文化国家・平和国家」のスローガンのもとに、政府を以しめ日本教職員組合を含む各労働組合民主的文化団体などによって推進されてきた日本社会の民主化は、朝鮮動乱を契機に大きく揺れ動いた。昭和二六(一九五二)年秋のサンフランシスコ会議における盟和条約の締結により日本は「独立」したわけだが、同時に日本安全保障条約、日米行政協定の成立によって、社会主義陣営に対する資本主義陣営の防共堤に位置づけられ、アジアに再び荷を向け始める。この

情勢の中で政府の文教政策はこれまで「国策改革の是正」の名のもとに戦後の教育改革の全面的批判とその再改革、再改革への「向を」示した。これらの動きに対し当惑多くの感嘆をよびおこす。教職員組合を中心とする多くの民主的諸団体は「教育を戦後から守ろう」とたちあがり、少しかのびるが教職員組合は多くが学校、実践家の協力のもとに「ひとりひとりの教師の、教師としての自覚や、人間としての近代的な精神や真の意味における愛国的行動」のよりどころである「教師の倫理綱領」を作つてゐる。戦後の教育が大きく密れ動くなかで片田村の津市との合併により、昭和二九(一九五四)年八月津市立片田小学校と改称された一農村の一小学校における教育も、教師の教育理念、地域の教育要求以外に、多くの要因によって規定される。政府の教育行政あるいは政策の転換、また子どもを真義のあるいは同様のにとりまく「悪劣、劣悪、愚悪、反人民的な文化……ワイロトバクそれらの周辺にある俗悪な映画、スポーツ、演劇、音楽、文学」などの俗悪文化とそれを黙認し助長させるような社会の現状もその一つである。

子どもは幸福を願う父と教師とが、相互理解の上に互に自由な雰囲気のもとで、何が真の国民のための教育であるかまた教育をより豊かなものにするにはどうしていけばよいかまたそれを練習するのは何であるか、個々ばらばらでなく組織的に臨んで考えていく問題であろう。再び教育の官僚統制によって、日本の破滅へ導かないために……